

ある世代以上の人々は記憶しているはずだが、構造主義や、物語論や、テーマ批評などいわゆるヌーヴェル・クリティック（新しい批評）が華々しい成果を挙げていた一九六〇—七〇年代、フローベールはブルーストやマラルメと並んで特種的な参照対象だった。物語や視点の構造、感覚世界の創出、文学者と社会の關係などを問いかける際に、フローベールとその作品はじつに豊かな示唆をもたらしてくれたからである。その後「生成研究」が発展すると、作家の草稿が数多く、しかも体系的に残されているという理由もあって、やはりフローベールは好んで論じられる作家となる。

他方、文学創造の側からしても、ヌーヴォー・ロマンの作家たちにとってフローベールは「先駆者」だったし、前衛集団ウリポは『感情教育』と『ブヴァールとペキュシェ』の作家に深い敬意を捧げた。サルトルやブルデューのよきな哲学者、社会学者が好んでフローベールについて語るのも、彼の存在の大きさを証言する。フローベールは二十世紀後半において、新たな批評装置の試金石であり、実験的な文学の拠り所であり、要するに文学の現代性あるいは現代性の文学を象徴するアイコンだったということである。

十九世紀フランスを代表する小説家の一人として、フローベールはゾラやモーパッサンやヘンリー・ジェイムズなど同時代の作家たちから敬愛され、二十世紀前半にはブルースト、ジョイス、カフカ、ヘミングウェイなど、多くの大作家たちに高く評価された。二十一世紀の現在も、フランスではアニー・エルノーやピエール・ミションが『ボヴァリー夫人』の作者に文学的な師を認め、ウエルベックの小説に見られる辛辣でときに絶望的なイロニーはフローベールの文学世界を想わせる。国境を越えても、イギリスのジュリアン・バーンズ、トルコのオルハン・パムク、ペルールのバルガス・リョサなどフローベールを愛読する作家は少なくない。恭しい敬意の対象にはなるが、現代作家には読まれないという、古典作家がしばしば陥る運命とは無縁に、フローベールは今でも文学者にとって回避できない参照項なのだ。

研究面では、生誕二百年を迎えた節目の今年、フランスではさまざまな雑誌が特集を組み、数多くの著作が出版され、論文集が編まれ、展覧会が企画され、複数のシンポジウム（コロナ禍の現状で一部オンライン）も開催されるなど、活況ぶりがよく分かる。これまでの研究成果を反映した新たな全集の刊行が、権威あるブレイヤッド叢書で二〇〇一年に始動し、本年五月に全五巻が完結したのは喜ばしい。フランス文学史上もつとも美しい書簡集のひとつと形容される彼の書簡集の優れた校訂版も、同じ叢書に全五巻で収められている。他方日本でも、『ボヴァリー夫人』、『サラムボー』、『ブヴァールとペキュシェ』などの主要作品がこの数年間で久しぶりに新訳されて、新たな読者を獲得している。フローベールはつねに若々しい作家なのだ。

では二十一世紀もすでに二十年経過した現在のわれわれは、フローベールの作品世界の中に何を読み取ることができるのか。十九世紀の文学的、知的世界において彼はどのような位置を占めるのか。そして二十世紀後半から現代にかけての作家・思想家にとって、彼の文学は何を啓示してくれたのか。そうした問いかけが本論集の基底にあった。第一部ではフローベールの主要作品が分析され、第二部では同時代の作家たちとの関わりが論じられ、第三部では、二十世紀後半を代表する何人かの作家たちがフローベールに向けた関心の力学が解きほぐされる。

最近三十年ほどのフローベール研究の主な成果と、新たな潮流については、松澤和宏が「序」で詳細に報告しているとおりである。わが国におけるフローベール研究は長い歴史を誇り、豊かな蓄積があり、フランス人研究者との交

流も深い。またフローベール研究会が存在し、定期的に研究発表会を催している。それらの場でなされてきた議論や意見交換が、本書の論考一つひとつに反映しているに違いない。また本年五月には、日本フランス語フランス文学会春季大会（上智大学、オンライン）においてワークショップ「生誕二百年、フローベールを読み直す」が企画され、本論集の寄稿者の数人がパネリストと司会を務め、多くの会員の参加を得て実りある議論を展開できたことを言い添えておきたい。

以上のような経緯を踏まえれば、作家の生誕二百年は、日本人による最新の研究成果を公にするのにふさわしい機会だった。本書は、松澤和宏が発案し、小倉がそれに加わって、コンセプトと構成を練ったうえで実現したものである。コロナ禍の中、それ以前になかったオンライン授業やさまざまな事務作業に忙殺される状況下で、本企画の意義に賛同し、協力を快諾してくださった執筆者の皆さまには、この場を借りてあらためて感謝の念を表明する次第である。そしてさまざまなアイデアを出して、本書の実現に貢献してくださった水声社編集部の中瀬寛さんにもお礼申し上げる。

二〇二一年八月

小倉孝誠